

町史

とっておきの話

201

長岡・河井継之助記念館友の会会員
高梁方谷会会員

小名 泰 裕

西の坂龍、東の蒼龍

ばんりゅう

そうりゅう

「坂龍」こと坂本龍馬の名前が空港名までになっているのをご存知ですか。高知空港が、今では高知龍馬空港という名称になっています。大阪空港から龍馬空港までは、一時間足らずです。

龍馬脱藩の道(檜原街道)、現在は遊歩道として整備されている



しかし、私が学生時代、大阪から高知に行ったときには、瀬戸内海を連絡船で渡り一日かかりでした。時期は三月下旬ごろです。龍馬(銅像)が立つ桂浜は初夏を想わせる気候でした。

一昨年、大阪の「蒼龍窟」のファンが塩沢の河井継之助墓前祭に出席したいが、どういふルートで只見に行こうかを迷っていたのを思い出します。大阪からだと距離的には北陸方面経由の方が近いのですが、結局、一旦東京へ出て、レンタカーで関越道・小出から只見に向かわれ

ました。飛行機を使っても新潟空港に降りて会津若松経由で向かうので、一日かかります。只見は、今でも関西からは遠いのです。

私が住んでいた大阪には、司馬遼太郎記念館があります。その記念館の主権で「龍馬脱藩の道・檜原街道ツアー」がありました。檜原街道は、高知から瀬戸内へ向かう峠道です。土佐藩を脱藩して檜原街道を歩く龍馬にとって、峠の向こうに希望が満ちています。ツアーに参加した老若男女は、「自分も龍馬のようになりたい」と話しながら歩く姿は楽しく明るいのです。

数年前、河井継之助ファンの集まりである「蒼龍窟が行くメンバー」で、八十里越古道をわずかですが歩きました。龍馬ファンが脱藩の道・檜原街道を歩きたいのと同様に、河井継之助ファンは、一度は八十里越を歩きたいのです。しかし、龍馬の希望に満ちた檜原街道とは違い、河井継之助にとって八十里越は絶望しかない峠道なのです。継之助ファンが、いざ、八十里越を歩くと言ったとき、この道を河井継之助が担架で運ばれたのです。話し、龍馬が持つことをで

きなかった時間を、継之助は得ました。坂本龍馬は、京都の醬油屋である近江屋で突然、刺客に襲われます。即死に近い状況で絶命したのです。反面、河井継之助は、ここ只見で十二日間も自分の死と向かいあう時間を与えられました。その時間は、身体的にも精神的にも苦痛だったに違いありません。それでも、自分の一生についての意味を考える時間が持てたのです。両者の死に場所も対称的です。龍馬は京都の大都会であり、継之助は片田舎の只見なのです。

坂本龍馬にも記念館があります。太平洋を見つめる龍馬の銅像が立つ桂浜のほとりに、坂本龍馬記念館があります。高知県立の立派な記念館です。河井ファンから見れば、羨ましい限りです。しかし、只見の河井継之助記念館は、町立で決して大きくはありませんが、自慢できるものがあります。それは、河井継之助が亡くなった部屋が現存していることです。龍馬といえども、遭難の地に碑が建っているだけなのです。



只見に唯一残る「河井継之助終焉の家」

館してあります。継之助は、生きている間も越後の雪に苦しめられます。そして死んでもなお今だに、雪国の辛さを甘受しているのです。

最後に、この対称的な二人、坂龍と蒼龍を作家の司馬遼太郎はどう見ていたのでしょうか。司馬さんの文を引用して終りたいと思います。

「この時代、河井継之助は新しい国家の青写真を持った唯一に近い坂本龍馬も持ちました。一人物だったのに、歴史は彼を忘れてしまっている。」

『街道をゆく40 台湾紀行』より